

第六章 すべての人が幸福を欲しているか？

1. 幸福論がなぜ『神学大全』の重要課題なのか

万人に共通の幸福概念・達成方法とは

人間行為の究極目的「幸福の追求」

注) 日本国憲法第13条基本的人権

生命・自由・幸福の追求

2. 『神学大全』第二部「人間論」

1) 人間的行為の究極目的の探究

人間にとっての望ましさ・善さの根源・最高善・完全な善

2) トマスにとっての究極目的の意味

注) (L)finis, (E)end, (F)fin, (G)Ende, (日)「善き」終わり

3) 究極目的に向かって生きる幸福の追求とは

人間の私たちをひきつけ

私たちに働きかけ

私たちを呼びさまし 能動たらしめる根源の最高善・完全な善

4) アリストテレス的自然学(生物学的な生成)の目的原因・形相原因

すべての人間に必然的に確定されている究極目的

第一根源(第一原因)の最高善を分有(内在)している人間本性の最高善の探究

5) 近代の世俗主義・人間中心主義の究極目的概念の喪失

人間を超越する価値概念・根源的目的概念の喪失

世俗価値→人間にとっての大事なもの、役に立つもの、快いもの

6) デカルトの「我思う、ゆえに我あり(ego cogito, ergo sum)」

人間意識が第一の真理→神学からの哲学の分離

近代科学(ex 機械論的・数学的な近代物理学)による自然現象理解

3. トマスの「人間の自由」vs 世俗主義・人間中心主義の「人間の自由」

1) トマスの「人間の自由」一人間の自然本性(人間本性、人間性)の実現にむけての自由

自由意思が誤った選択をすることが不可能な究極目的の最高善・完全な善

に向けての「人間の自由」

最高善・完全な善に秩序付けられた「人間の真の自由」の選択—幸福の追求

2) 人間中心主義・世俗主義の「人間の自由」

誤った選択もあり得る人間の自己決定の絶対視

4. トマス倫理学の核心

1) トマス幸福論の課題

(1) 人間の究極目的の幸福の本質・意味

人間の自然本性(人間本性、人間性)完成に向けての最高善・完全な善

(2) 現実の人間は幸福を何に見出しているか

ある人は富、ある人は快樂 etc→千差万別

- (3) トマス倫理学—人間自然本性の全体的で根源的探究
 - 2) 1) — (3) の観点を忘却した現代諸科学
 - (1) 専門化、細分化、断片化、部分化した人間研究の諸科学の現在
 - (2) 価値、当為の問題の倫理学の重要性 (ex 医学の前線と生命倫理、企業行動と企業倫理 etc)
5. 神の啓示による道を旅する途上の人間の「幸福の追求」
 - 1) 地上における人間の自然本性 (人間本性、人間性) の完成の未完結性
(vs アリストテレス『ニコマス倫理学』『政治学』)
 - 2) 人間の一生
「人間である (人間本性)」ことの完成に向かって
「人間である」ことを学び続け、
地上の「旅する者・人間 (homo viactor)」の
「途上 (in via)」の一生
注) 人間は神の力を分有しながらも、不完全に生まれ、どんなに努力しても不完全で終わる存在。人間の
力では人間本性の実現・完成は不可能。
 - 3) 地上で旅する「道」の延長が来世において最高善・完全な善に至る達成方法

信仰の道にゆだねた確実な認識
6. 人間の究極目的・幸福をめぐる考察
 - 1) 第一問題 究極目的への到達が「幸福」
 - 2) 第二問題 幸福の考察①
「有限な善いもの (=被造的な善)」は真の幸福ではない
富、名誉、名声、権力、快樂 etc
 - 3) 第三問題 幸福の考察②
 - (1) 「無限な善いもの」は究極目的の幸福に至る達成方法である
 - (2) 人間の最高の能力 (可能性) の最高の働き (現実性)
としての「神の本質の直視 (visio essentiae Dei)」する可能性 (受容力 *capacitas*) を有している
「神の本質の直観」「顔と顔を合わせて神を見る」
(ex ダンテ『神曲』の天国編、天国における幸福の喜びの予感、限られた方法での神秘的合一経験)
 - 4) 第四問題 幸福の成就の必要条件
 - (1) 心の清い人々は幸いである
その人たちは神を見るであろうから (『マタイ福音書』V—8)
 - (2) 心の清さ=意志の正しさ (最高善・完全な善へ秩序づける唯一の力)
 - 5) 第五問題 地上で最高善・完全な善に至る未完結性
 - (1) 不完全で生まれ不完全で終わる一生。だが来世で達成する信仰の確信
 - (2) 正しく欲する=善い意志をもつ
究極目的へ導く「道」の徳をつむこと
7. 究極目的・幸福に至る明確な見通し
—価値の優先順位の確立—
 - 1) 神の本質を直視 (*theoria, contemplatio*) すること
幸福とは存在、生命、何らかの状態ではなく
人間が備えている可能性の究極の現実化の働きである

人間の最高の能力(可能性)の最高の働き(現実化)とは何か

2) 人間知性の自然本性的な「知りたい」という欲求

(1) 「神の本質の直視」とは、神的知性を分有している人間知性が第一原因の本質そのものに到達すること
(「顔と顔を合わせて神を見る」こと)

(vs 現代の諸科学に依存する知性は感覚を通じて働かせている)

(2) 地上におけるオーケストラの練習、リハーサル

途上の生で到達できる「不完全な幸福」

(3) 人間の知性は

全的で完全な善 (universale et perfectum bonum) を捉えることが可能であり、

また人間の意志は それを欲求することができる

(4) 人間の「知りたい」という自然本性的願望は

「無限なものにまで開かれた力 (virtus ad infinitia)」の洞察の力である。

(5) 神(根源的原因、第一原因)の恩寵によって、

神的本性を分有(内在)する

人間の精神(知性と意志を含む)は、「無限への能力」を与えられている。

その意味で「神のかたち (deiformis)」となり「神化 (deificatio)」されることが可能である

それが神を観る(観想、theoria, contemplatio)ということである。

8. トマス倫理学の基本原則—地上での未完結性—

1) 人間の倫理的行為を成立させる原理は、「徳と法(自然法)」である。

2) トマスの倫理学の基本原則—究極目的の幸福は、徳の母である愛徳(caritas)を根元に諸々の徳を形成すること。

3) 地上における一生は、

幸福の享受ではなく、神からの友愛(amicitia)の招きに応え

友愛をもって神を愛し、愛徳(caritas)によって神との合一を追求することである

4) より多くの愛(caritas)を有する者は

より完全に神をみるであろう

そしてより幸福になるであろう

9, 10. 来世における最高善・完全な善の幸福への到達

1) 使徒パウロ

神がご自分を愛する者のために

用意してくださったもの(幸福)は、

人の心に思い浮かんだこともなかったことであった

2) 人間の自然本性は

自らを無限に超え出て神性を分有することによって

まさしく(来世において)人間本性として完成される

3) 地上において

完全な幸福を分有できる

観想的な生活(vita contemplativa)の実践

11. トマスの「無限への自己超越」のダイナミズム

1) 人間の「知性と意志」は「無限への力」へ向かう

2) パスカル

人間は無限に人間を超えていることを知れ

3) トマスの「神の本質の直視」

人間はこの世界で時間のうちに存在しながら

無限・永遠な存在と 直接に結びつくことによって

自らを超越する能力 (自由) を有している

人間の自己超越は「神性の分有 (内在)」によって実現される